

二〇〇五年五月一日（夕拝）

愛にある交わりの拡大

創世記一章二六節～三一節

創世記一章二八節には、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。」

と記されています。これは、一般に「文化命令」と呼ばれている神さまの祝福の御言葉を記すものです。

この神さまの祝福の御言葉は大きく二つに分けることができます。一つは、生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。

です。これは、神さまがお造りになった「地」との関係を示しています。もう一つは、

海の魚、空の鳥、地をはうすすべての生き物を支配せよ。

です。これは、神さまがお造りになった「いのちあるもの」との関係を示しています。

すでにお話ししましたように、最初の、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。

までは、二二節に記されている、

生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。

という、生き物たちへの祝福と同じです。この場合は水に棲む生き物たちのことですが、それが最初に造られた「いのちあるもの」として、その後には造られた「いのちあるもの」を代表していると考えられます。新改訳の二八節で「満たせ」と訳されている言葉と二二節で「満ちよ」と訳されている言葉は同じ言葉の同じ形です。ここには二つの祝福の御言葉の類似性が見られます。

それとともに、この二つの祝福の御言葉には違いもあります。一つは、これもすでにお話ししたことです。二八節に記されている祝福の御言葉は神の私たちに造られている人間に対して語りかけられており、人間はそれを聞いて、理解しています。けれども、生き物たちへの祝福の御言葉は生き物たちに向かっ

て語られています。生き物たちはそれを聞いて理解しているわけではありません。神さまは生き物たちに、生れて増えていくための多産性を備えてくださっただけでなく、本能をも備えてくださっています。神さまの祝福の御言葉は、それらが有効に用いられて、生き物たちが増え広がっていくことを支えてくださっています。

これに対して、神のかたちに造られている人間の場合には、神のかたちとして造り出されて存在するようになったその時から、造り主である神さまの御前にあることを意識し、神さまとの交わりのうちに生きていました。そして、この祝福の御言葉を造り主である神さまからの祝福の御言葉として聞いています。これによって、自分たちが初めから造り主である神さまの祝福の下に置かれていることと、人が生まれて増え広がっていくことが神さまの祝福によるということを理解することができたのです。神のかたちに造られている人間の場合には、生れて増え広がっていくことは、本能的なことである以上に、人格的なことであり、造り主である神さまの祝福の御言葉に対する応答としての意味をもっています。

*

二つの祝福の違いのもう一つのことですが、二八節に記されている神さまの祝福の御言葉は、二七節の後半に、

神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

と記されていることにつながっています。すでに二七節を取り上げた時にお話ししましたように、この、

神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

という御言葉は、男性も女性も神のかたちに造られているということを示しています。ですから、人間の場合には、それぞれ神のかたちに造られている男性と女性の結びつきによって生み、増え広がりが、地を満たすということが実現していきます。この点においても、神のかたちに造られている人間の場合には、生み、増え広がりが、地を満たすことは人格的なことであることが見て取れます。つまり、それは、造り主である神さまとの人格的な関係だけでなく、それとともに、同じく神のかたちに造られている男性と女性の間の人格的な関係において実現することなのです。

さらに、人間の場合には、生み、増え広がりが、地を満たすことは、最初の一組の男女から始まっています。他の生き物たちの場合には、群れから始まって、

その群れの拡大という形で増え広がっていきませんが、人間の場合には、最初の一組の男女から始まっているのです。ここには、それぞれ神のかたちに造られていて自らの自由な意志をもつ男性と女性の人格的な出会いと、愛による交わりがあります。これによって、このような男性と女性の愛による結びつきが、人が生み、増え広がり、地を満たしていくことの出発点であり中心であることが示されています。

もう一度二七節の後半に記されていることと二八節に記されていることとのつながりを見てみますと、二七節の後半には、

神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

と記されており、これを受けて二八節には、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。

ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

と記されています。このつながりから、二八節において、

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。

と言われていることは、基本的に、二七節でもにも神のかたちに造られていると言われている男性と女性について語られているということが分かります。つまり、男性と女性がともに造り主である神さまの祝福にあずかっており、ともに、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうす

べての生き物を支配せよ。

という神さまの語りかけを聞いているのです。ですから、神のかたちに造られている男性と女性のそれぞれが、このように祝福してくださっている神さまの祝福の下に、夫と妻としての愛のうちに結び合い、それぞれが、神さまに応答して、生み、増え広がり、地を満たすという使命を果たしていくのです。

この点は大切なことですので、さらに、神のかたちに造られている人に焦点を合わせている一章の一八節、二五節において、詳しく取り上げられています。

*

このように、神のかたちに造られている人間の場合には、造り主である神さまの祝福の下に、男性と女性の人格的な結びつきによって主にある家庭が形成され、そこに子どもたちが生まれてきて家族を形成するという形で、生み、増え広がり、地を満たすことが実現していきます。このことに関して三つのこと

を考えておきたいと思います。

第一のことは、すでに触れたことですが、造り主である神さまの祝福の下で人が生まれ、増え広がって地を満たしていくことの基本的な単位は家族にありますが、その中心は、それぞれ神のかたちに造られている男性と女性の結びつきにあるということです。

古代の社会に限らず、いつの時代においても親子の関係は大切なものとして尊重されています。それは、御言葉の教えにおいても例外ではありません。十戒の第五戒を記している出エジプト記二〇章一二節には、

あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの年齢が長くなるためである。

と記されています。十戒の第一戒～第四戒は契約の神である主との関係にかかわる戒めです。そして、第五戒～第一〇戒は主の契約の民の相互の関係にかかわる戒めです。そのお互いの関係にかかわる戒めの第一に上げられているのが、

あなたの父と母を敬え。

という戒めです。そして、この戒めは、

あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの年齢が長くなるためである。

という注釈が付いているという点でも特別なものです。

このように、御言葉においては、親子の関係はとても大切なものとして教えられています。けれども、人が生まれ、増え広がって地を満たしていくことを中心は、親子の関係にはなく、それぞれ神のかたちに造られている男性と女性の結びつきとしての夫と妻の関係にあるのです。

この点は、二七節後半と二八節のつながりから考えられることですが、さらに、二章二四節に、

それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

と記されていることにおいてより明確に示されています。このことの意味については、二章二四節を取り上げる段になりましたらより詳しくお話ししたいと思います。親と子という縦の関係には、子が親に依存するという面があります。そして、親と子の関係は子ども誕生によって始まりますから、お互いが相手を選ぶことはできません。これに對しまして、夫と妻の関係は、お互いに自立し独立しているものとして出会って、愛のうちにお互いの意志によって結

び合うものです。造り主である神さまの祝福の下に、人が生まれ、増え広がって地を満たしていくことの中心は、このような夫と妻の愛による結びつきにあります。

これは神のかたちに造られている人間の社会においては、それぞれ神のかたちに造られている男性と女性の結びつきとしての結婚がその基本にあることを意味しています。マタイの福音書一九章四節～六節には、離婚について質問したパリサイ人たちに対するイエス・キリストのお答えが、

創造者は、初めから人を男と女に造って、「それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ。」と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。

と記されています。

*

第二に考えられることは、このように、人間の場合には、造り主である神さまの祝福の下に、男性と女性の人格的な結びつきによつて主にある家庭が形成され、そこに子どもたちが生まれてきて家族を形成するという形で、生み、増え広がり、地を満たすことが実現していくのですが、このことには、神さまの創造の御業に類似している面があるということです。この類似性は二つの面から考えることができます。

まず考えられるのは、夫と妻が子を生み出すということが神さまの創造の御業に類似しているということです。

詩篇九〇篇一節、二節には、

主よ。あなたは代々にわたって

私たちの住まいです。

山々が生まれる前から、

あなたが地と世界とを生み出す前から、

まことに、とこしえからとこしえまで

あなたは神です。

と記されています。ここでは、神さまが「地と世界とを生み出」されたと言われています。もちろん、これは神さまの創造の御業のことを比喩的に述べたものです。

新改訳の、

あなたが地と世界とを生み出す前から、

という訳はヘブル語本文にそった訳です。これに対して、神さまが「地と世界とを生み出」されたというのは、神さまとこの世界の連続性を意味していて創造者と被造物の区別を曖昧にしてしまう異教的思想であると主張する人々がいます。そして、このことから、この部分は「あなた」と呼ばれている神さまを主語としないで「地と世界」を主語として、

地と世界が生み出す前から

と訳すべきであるという意見があります。つまり、「地と世界」がその前の「山々」を、地の隆起、陥没によって生み出したことを述べているというのです。

しかし、そのようなことを言うのであれば、その前の、

主よ。あなたは代々にわたって

私たちの住まいです。

という告白も、神さまと私たちの区別を曖昧にするものであると言わなければならぬでしょう。それに、

まことに、とこしえからとこしえまで

あなたは神です。

という告白によって、永遠にいます神さまと、時間的な存在であるものとの区別は十分に示されているのではないのでしょうか。

さらに、神さまの創造的な御業を生み出すことにたとえている例は申命記三二章一八節に見られます。そこには、

あなたは自分を生んだ岩をおろそかにし、

産みの苦しみをした神を忘れてしまった。

という、イスラエルの民に対するモーセの告発の言葉が記されています。この「産みの苦しみをした神」の「産みの苦しみをした」と訳されている言葉（ヒール）は、詩篇九〇篇二節で、

あなたが地と世界とを生み出す前から、

と言われている中で「生み出す」と訳されている言葉と同じ言葉です。

これらのことから、詩篇九〇篇二節前半は、新改訳のように、

山々が生まれる前から、

あなたが地と世界とを生み出す前から、

と訳したほうがいいと思われれます。そして、このことに、人が子を生み出すことと神さまの創造の御業の類似性が見て取れます。もちろん、このように見ることが、創造者にして無限、永遠、不変の神さまと、有限な被造物である私たちの区別を曖昧にするものであつてはならないわけです。

*

ここには、もう一つのより大切な類似点があります。

創世記一章二六節には、

そして神は、「われわれに似るよつに、われわれのかたちに、人を造らう。

そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配せよう。」と仰せられた。

と記されています。ここで神さまはご自身のことを「われわれ」と呼んでおられます。すでにお話ししましたように、この場合の「われわれ」は、神さまご自身のうちに複数の人格（位格）があることを示していると考えられます。そして、このことは、ただ神さまが複数の人格（位格）において存在しておられることを示すだけでなく、ここに、複数の人格（位格）においてある神さまのうちに、語りかけによる交わりがあることを示しています。つまり、ここでは、人を神のかたちにお造りになるに当たつて、神さまのうちに人格的な交わりがあつたことが示されているわけです。

ヨハネの福音書一章一節、三節を見ますと、一節、二節において、

初めに、ことばがあつた。ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。この方は、初めに神とともにおられた。

と記されています。いろいろな機会にお話ししてきたことですが、一節では、

ことばは神とともにあつた。

と言われており、二節では、

この方は、初めに神とともにおられた。

と言われていて、永遠の「ことば」が父なる神さまとの永遠の愛にある交わりの中にいますことが示されています。そして、このことを受けて、三節には、

すべてのものは、この方によつて造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。

と記されています。これによつて、この造られた世界の「すべてのもの」は父なる神さまとの無限、永遠、不変の愛の交わりのうちに充足しておられる御子によつて造られたことが示されています。その意味において、創造の御業は、

神さまがご自身の愛を、ご自身が造られたこの世界に注いでくださる御業です。

これらのことを念頭において、創世記一章二六節の、

そして神は、「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。

そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべ
てのものを支配させよう。」と仰せられた。

という御言葉を読みますと、神さまが人を神のかたちにお造りになったのは、
人にご自身の愛を注いでくださり、人をご自身との愛にある交わりのうちに生
きるものとしてくださるためであることが分かります。

それぞれが神のかたちに造られている男性と女性が愛のうちに結びあつて家
庭を形成し、そこに子どもたちが生まれてくることは、その男性と女性の愛の
交わりが子どもたちを包み込んで、その愛の交わりが拡大していくことです。

このことは、創造の御業において神さまがご自身の愛を、神のかたちに造られ
ている人に注いでくださり、人をご自身との交わりのうちに生きるものとして
くださったことと類似しています。

*

このことを踏まえて、もう一つのことを考えておきたいと思います。今お話
しましたように、人間の場合には、造り主である神さまの祝福の下に、男性
と女性の人格的な結びつきによって主にある家庭が形成され、そこに子どもた
ちが生まれてきて家族を形成するという形で、生み、増え広がり、地を満たす
ことが実現していくのですが、それは、愛の交わりが拡大していくことを意味
しています。

私たちは、神のかたちに造られている人間が造り主である神さまに対して罪
を犯して御前に墮落してしまつている状態の世界に生きています。御子イエス・
キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりによって成し遂げられた罪
の贖いにあずかつて、罪を赦され、罪と死の力から解放された主の民が生み出
す歴史が造られているとはいえ、今なお、人間の罪がもたらす苦しみと叫びの
絶えない世界が続いています。そのような世界において人が生まれて、増え広
がり、地を満たしていく過程において、領土や主権をめぐる争い、紛争、戦い
は後を絶ちません。けれども、それは神のかたちに造られている人間の罪によ
る墮落の後のことです。本来は、神のかたちに造られている人間が、子どもた
ちを生み、増え広がって、地を満たすようになることは、造り主である神さま
の祝福によることです。そして、それは、愛にある交わりが拡大していくこと

なのです。

大切なことは、このような愛にある交わりの拡大があって初めて、これに続いて記されている、

地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。という使命が果たされるということです。それは、ただに、神のかたちに造られている人間の間において愛の交わりが拡大していくというだけでなく、その愛が、神さまがお造りになった生き物たちにも向けられて拡大していくということを意味しています。

これは、先ほどお話ししました、造り主である神さまの愛が創造の御業によって、神さまがお造りになったこの世界に向けて注がれるようになったということが、実際に、この世界の歴史の中で実現していくことを意味しています。神のかたちに造られている人間は、造り主である神さまからそのような祝福を受け、そのような使命を委ねられているのです。

このことを考えますと、今のこの世界の現実との余りの違いに驚かされます。神のかたちに造られている人間が造り主である神さまに対して罪を犯して御前に墮落してしまったことによってもたらされた傷の深さを思い知らされます。パウロはローマ人への手紙八章二二節において、

私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

と述べています。私たちもこの全被造物のうめきを聞かないわけにはいきません。

しかし、このうめきは、一九節～二二節において、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。

それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。

と記されている約束と望みの中で、その実現を待ちつつ発せられるうめきです。その望みが確かな望みであることは、御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりにあずかって罪を贖われ、造り主である神さまとの愛にあるいのちの交わりのうちに生きている神の子どもたち、すなわち、

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。

とあかしされている神の子どもたちが出現していること示されています。

今私たちは、天地創造の初めに造り主である神さまが祝福とともに語りかけてくださった、

生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。

という御言葉に示されている使命を、御子イエス・キリストが十字架の死と死の中からのよみがえりによって成し遂げてくださった贖いの恵みにあずかって、神の家族の愛の交わりを実現し拡大するという形において担っているのです。そして、御子イエス・キリストの贖いの御業によって全被造物がまったく回復にあずかることを信じて、

御国が来ますように。

みこころが天で行なわれるように

地でも行なわれますように。

と祈りつつ、栄光のキリストの再び来られる日を待ち望んでいます。